文化財保護課

群馬県前橋市

西久保遺跡

埋蔵文化財発掘調査報告書

1993

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

序

前橋市は、北に赤城山、西に榛名山を望む関東平野の北部を市域とした県都であります。北から南に貫流する利根川の清流は「水と緑と詩の町」を潤し、かつては「糸の町」として養蚕製糸で栄えてきました。今、人口２８万を擁し生涯学習に力を入れ、教育文化・総合福祉・産業振興など「活力と魅力ある総合機能都市」づくりが進められています。

西久保遺跡のある総社・元総社地区は、市の中心街地から北西の利根川右岸にあり、古来上野国の中心として古墳時代には数多くの古墳が築かれ、律令政治の時代には国府がおかれ、中世には元総社町の大部分を城郭とする、県下の大城郭で最古クラスと言われる守護代長尾氏の蒼海城があり、近世には秋元氏の総社城築城や天狗岩用水や五千石堰が開削されるなど、また城下町から宿場街としての役割も果たし、４００年あまり経た今も宿場の地割が現存するところであります。戦後昭和30～40年代の土地区画整理事業が行われ、大規模工場の誘致が進められるなど、前橋市が消費都市から現在の生産都市への発展に大きく踏出すさきがけとなった地域であります。

この調査は、民間宅地開発事業による宅地造成工事に先がけて埋蔵文化財の緊急発掘調査を実施したものであります。

調査では、縄文時代の遺跡包含地域と平安時代の住居址５軒、溝２条、土坑18基を確認し、数多の縄文土器片、石器、平安時代の土師器、須恵器等の遺物を検出することができました。

この調査に当たり住友林業株式会社をはじめ多くの方々のご理解とご協力により調査報告書が刊行できましたことに厚く御礼申しあげます。

平成５年３月

前橋市埋蔵文化財発掘調査団
団　長　　有　坂　　淳

例 言

1　本書は都市計画法第29条の開発行為（宅地造成事業実施）に先がけて実施した埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は前橋市教育委員会のもとに組織された前橋市埋蔵文化財発掘調査団（団長　有坂　淳）の委託を受け、スナガ環境測設株式会社（前橋市青柳町２１１－１　代表取締役　須永眞弘）が実施した。

3　調査担当者　新保一美　（前橋市埋蔵文化財発掘調査団　発掘調査係員）
　　金子正人　（スナガ環境測設株式会社　専務取締役）

4　遺　跡　名　西久保遺跡　略称４Ａ－６３

5　所　在　地　前橋市総社町植野字西久保

6　期　　間　発掘調査　平成４年８月７日～４年８月31日
　　調査整理　平成４年９月１日～５年３月25日

7　調査面積　Ａ＝　420㎡

8　出土遺物は、前橋市教育委員会で保管している。

9　本書は、調査団の指導のもとに、スナガ環境測設株式会社埋蔵文化財調査部（専務取締役兼部長　金子正人）が作成に当り、執筆を金子正人、校正・編集を須永眞弘・勝田貞幸、文書の清書を須永薫子、遺物実測・計測を佐々木智恵子、遺物復元を鈴木赳夫・佐々木智恵子・柴崎信江・須永豊、トレースを小林裕美、写真製版を鈴木赳夫、内業事務を須永豊が担当した。

10　測量・調査計画は須永眞弘（測量士　第 52614号）が行い、調査の指揮指導を金子正人、遺構・遺物の写真撮影を金子正人・勝田貞幸（調査員）、作業事務を柴崎信江が担当した。

11　調査にご協力を戴きました住友林業株式会社山口博人氏を始め、地元の方々並びに調査及び整理に際して種々とご指導を頂いた方々に心より感謝申し上げます。

12　調査に参加した方々（順不同）

石川サワ子	内山恵美子	八木武史	矢野仁一	野口栄一	登坂正	上原薫
野口たかね	内田重二郎	新井重男	伏島克太	山崎勘治	宮前実	上原亮

凡 例

1　遺構の略号

Ｊ－縄文時代の住居址　Ｈ－平安時代の住居址　Ｗ－溝　Ｓ－集石　ＴＲ－トレンチ
Ｄ－土坑

2　実測図の縮尺

全体図Ｓ＝1/200　住居址Ｓ＝1/60　カマドＳ＝1/30　溝・集石Ｓ＝1/60

遺物実測図S＝1/3　その他の縮尺を使用した場合は個々に表示した。

3　挿入図

国土地理院発行の５万分の１「前橋」を使用した。

4　遺跡の位置・基準等

基 準 点　　国土地理院三角点及水準点を照合済み

A-5 地点　　第Ⅸ系座標値　X＝ 46,700.00m　Y＝-71,660.00m

水 準 点　　BM_1 H＝141.50m

等 高 線　　10 cm

グリッド　　4 m 間隔

5　土層断面の土色名及び土器類の色調名は「新版標準土色帖」による。

目　　次

序

例言

凡例

目次

Ⅰ　遺跡の位置と環境……1

Ⅱ　調査の概要……2

Ⅲ　調査の経緯……2

Ⅳ　基本土層……3

Ⅴ　遺構と遺物……4

1　縄文時代……4

住居址・溝・集石……4

2　平安時代……4

（1）住居址……4

（2）土　坑……6

3　その他……7

Ⅵ　まとめ……8

出土遺物観察表……9～10

遺構実測図１～５

遺物実測図１～３

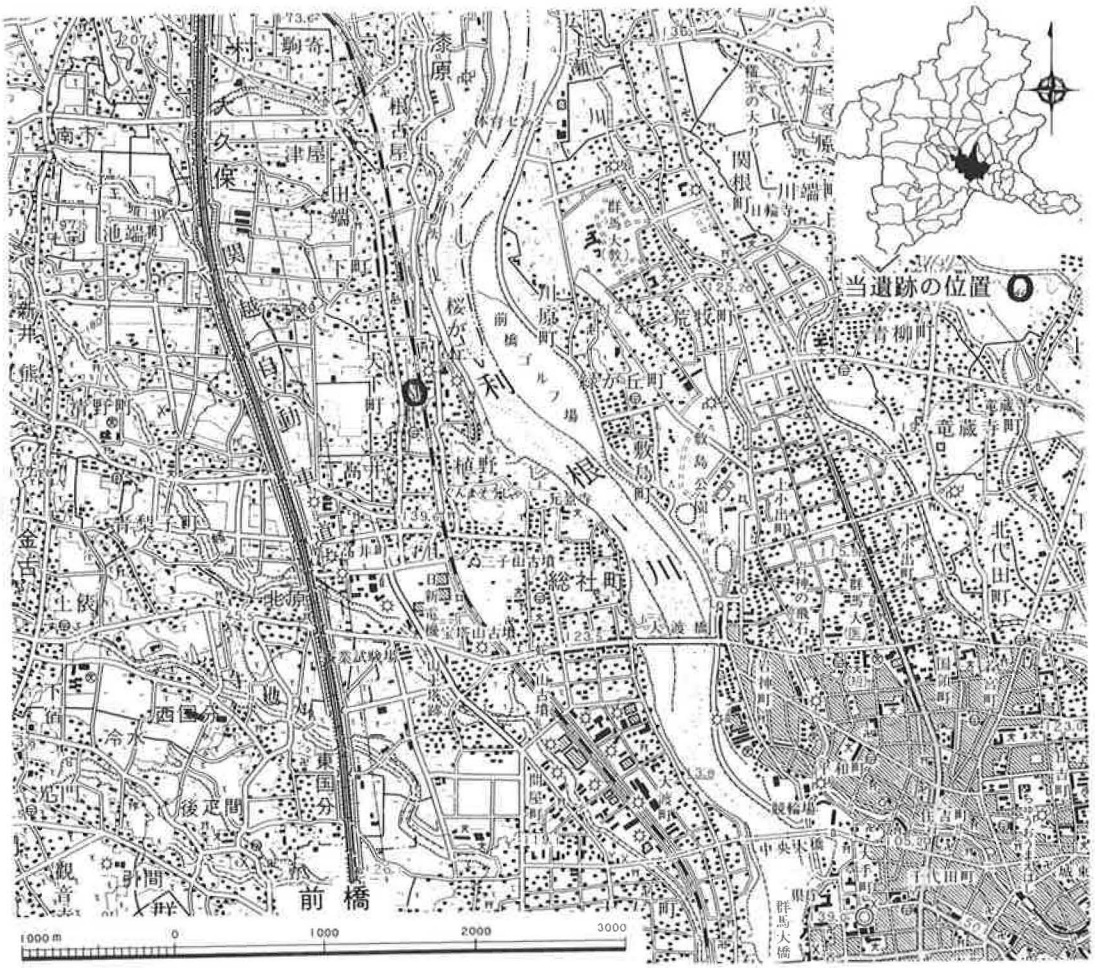
図　　版１～10

全体平面図１

Ⅰ　遺跡の位置と環境

西久保遺跡が所在する前橋市総社町植野1156番地（字西久保）はＪＲ上越線群馬総社駅より北へ500m地点である。榛名山東南麓に広がる火山傾斜面が終り前橋台地が東南に大きく広がり始める。これに沿って東流する午王頭川は、榛東村の最北域吾妻山付近より発し吉岡町から当遺跡の西（吉岡町大字大久保字大下）を通り、総社町植野元景寺北で利根川に合流、その間大凡10ｋｍに及んでいる。中世末には「午王頭川から取水し、勝山城の用水として使用されたもの思われる」（市史第二巻93頁）としている。近世では、天狗岩用水から分水し、総社城内濠の用水、宿場用水、水田用水として現在の元総社・総社地区はもちろん、高崎市中尾町・日高町・新保町など高崎市の北部地域まで、合わせて五千石の潅漑地をもつことから、五千石堰とよばれている。

この午王頭川の左岸に位置する遺跡で、周辺には若宮遺跡、柿木遺跡、桜が丘遺跡、稲荷山古墳、清里陣場遺跡、二子山古墳、愛宕山古墳、宝塔山古墳、蛇穴山古墳、山王廃寺跡、国分僧・尼寺、国分寺中間地域遺跡、上毛野国府、王山古墳など貴重な遺跡が集中する地域である。



Ⅱ　調 査 の 概 要

開発業者の調査依頼を受けて市教育委員会がトレンチ法で試掘調査を行った。試掘調査は道路の構築予定地にトレンチを入れ住居址等の遺構の存在することを確認した。前橋市埋蔵文化財発掘調査団が調査主体となり、平成 4年 8月 7日から発掘調査することになった。

調査は試掘トレンチに沿って、表土60～80cmの深さを機械（バックホウ）排土し、遺構プランを確認し発掘調査に入った。

調 査 の 基 準

Ａ－１地点の公共座標は第Ⅸ系　Ｘ＝46,700.00m、Ｙ＝－71,676.00m、Ａ－５地点をＸ＝46,700.00m、Ｙ＝－71,660.00mに測設し、これを基準として調査区を北西隅より緯線（Ｘ軸）にＡ・Ｂ・Ｃ……、経線（Ｙ軸）に１・２・３……とする4mグリットを設定した。

水準基準点（ＢＭ）標高を141.50m に測設した。

住居址、及びカマドは原則として確認面で十字にベルトを設定し土層観察を行った。

土坑・貯蔵穴は半載して土層観察を行った。

出土遺物は図面1/10～1/100 のスケールで平面図・高さ等を記録後取り上げた。

その他の遺物はグリッド毎に、住居址・土坑などの遺構に流れ込んだ遺物は遺構毎に一括として取り上げた。

写真の撮影は、カラー、白黒、カラーリバーサルフィルムで記録した。

Ⅲ　調 査 の 経 緯

西久保遺跡は宅地造成工事に伴う都市計画法29条の開発行為にさきがけ前橋市宅地開発指導要綱（昭和48年前橋市告示第10号）第９条（文化財保護）の規定により開発事業者住友林業株式会社山口博人氏（東京都新宿区西新宿６丁目14番１号）から市教育委員会に事前協議があり確認調査を行ったところ奈良・平安時代の住居址を確認した。開発事業者と協議調整のうえ平成４年８月７日より前橋市埋蔵文化財発掘調査団で発掘調査を実施することとなった。

調査経過（調査日誌より）

平成４年８月７日　作業事務所設置、機材等搬入

同日　重機にて表土堀削作業開始

10日　調査区東側（ＪＲ側）防災用フェンス設置

12日　ジョレン掻き、プラン確認作業開始

19日　住居址調査開始（１～４号）

20日　グリッド杭設定開始

21日　水準点（ＢＭ＝141.50m)設定

24日　縄文土器包含層発掘（住居と溝）

同日　土坑２～15発掘、線引き、写真撮影

25日　雷雨により調査区水没する。

27日　カマド発掘開始

29日　カマド（１～４号）完掘、平面図１/20 実測

31日　全体図１/100実測　コンター記入

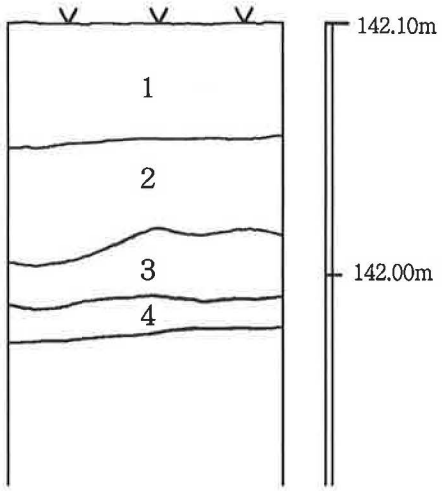
西久保遺跡発掘調査終了

９月１日～２日　作業事務所機材等の搬出及びかたづけ

３日　整理業務開始

平成５年３月20日　整理業務終了

Ⅳ　基本土層



１層　耕作土

２層　２層より締まっている軽石を多く含む灰褐色土層

３層　３層より軽石が多く焼土粒が僅か見られる黒褐色土層

４層　黄褐色自然堆積層

Ⅴ 遺構と遺物

調査は縄文時代住居址１軒の調査、溝（Ｗ－3）１条、それに伴う集石１ケ所、土師器を伴う平安時代の住居址５軒、土坑６ケ所の調査を行った。その外に現代の芋穴址（甘藷の貯蔵穴、牛蒡、署薯藷等の栽培に伴う土坑(D－1･3･4･8･9･10･11･12･16･17･18) 11 ケ所、電柱の支脚跡（Ｄ－5･6 ）2 ケ所、溝（Ｗ－1･2 ）2 条については位置確認のみを行った。

1　縄文時代

Ｊ－１号住居址

調査区南東隅Ｊ・Ｋ－6･7 グリッドに位置する。地表面から60cm程排土した確認面にある。覆土は軽石と焼土粒を含む黄褐色土が堆積している。住居址の形状は、東側半分が調査区外で不明であるが直径4.00m 程の円形を呈するものと思われる。炉と柱穴も不明である。

遺物は後期掘之内（Ⅱ）式土器を多く検出した。その外に加曽利Ｂ、加曽利Ｅ２様式土器も検出した。

溝（Ｗ－３）と集石（Ｓ）の位置確認

調査区の南端部Ｊ・Ｋ－4･5･6 、Ｌ－5･6 グリッドでHr-FA の帯状（30～50cm）堆積を確認した。このHr-FA にトレンチを入れたところ、その下部から敷石状の集石が確認された。この溝は台地の先端部を北西から東南に横切る形になると思われる。

2　平安時代

（1）　住居址

Ｈ－１号住居址

調査区北西隅のＢ－3･4 グリッドに位置する。地表面から70cm程排土した確認面にある。覆土は焼土粒を含む黒褐色土が堆積しているが耕作により床面まで撹乱されている。

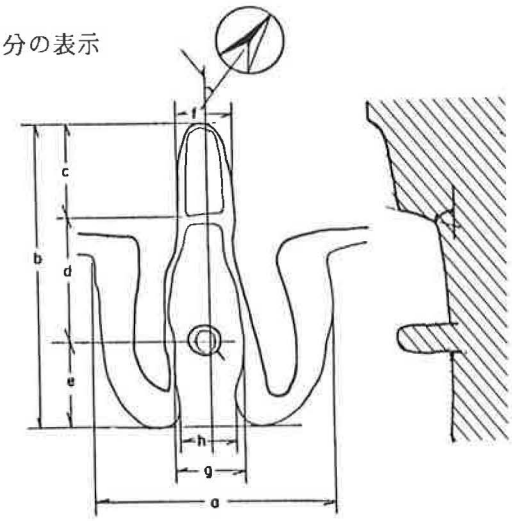
Ｈ－２号住居址と重複する。Ｈ－２号住居址の床面より 5～15cm上にカマドが築かれているのでＨ－１号住居址の方がＨ－２号住居址より新しく、前橋市域では平安時代の重複する住居は西方に後退する傾向が見られるが、この場合もその例と考えられる。

住居址の形状は長軸南北方向4mと、短軸東西方向3.6mが推計され、隅丸長方形を呈しているものと思われる。長軸方向はＮ－ 103° －Ｅを測る。

壁はほとんど計測できなかった。堅い床面の範囲からＨ－１号住居のプランを推定した。ピットも確認されなかった。

カマドは東壁中央やや南寄りに位置し、カマドの主要部分は壁内で煙道が壁外に構築されている。主軸方向は（θ）Ｎ－86 °－Ｅを測る。左袖部が比較的良く残っている。

カマドの各部分の表示



a：最大幅
b：全長
c：煙道長
d：燃焼部長
e：炊き口部長
f：煙道部幅
g：燃焼部幅
h：炊き口幅
θ：主軸方位
σ：煙道部立ち上がり角

カマドの寸法は最大径（a）＝ 138cm、全長（b）＝ 145cm、煙道部幅（f）＝17cm、燃焼部幅（g）＝43cm、煙道部立ち上がり角度（σ）＝40 °を測る。

Ｈ － ２ 号 住 居 址

調査区北西部隅Ｂ－3･4 グリッドに位置しＨ－１号住居址と重複して確認された。地表面より70cm程排土した確認面にある。覆土は焼土粒、炭化物を含む黒色土と焼土粒を含む黒褐色土が堆積している。南西隅コーナの覆土の上にＨ－１号住居址のカマドが築かれている。住居址の形状は長軸南北方向3.38m 短軸東西方向2.98m を測り、隅丸長方形を呈す。主軸方向はＮ－92 °－Ｅを測る。壁は95 °に立ち上がる。主柱穴は確認できなかったが、貯蔵穴が南東コーナに壁柱穴が北壁から北西コーナの付近で14ケ所確認された。

カマドは東壁中央部やや南寄りに位置し、壁内に主要部分が構築されている。主軸方向は（θ）＝Ｎ－92 °－Ｅを測る。カマドの寸法は最大径（ａ）＝83cm、全長（ｂ）＝117cm 、燃焼部幅58cm、煙道立ち上がり角度（σ）＝27 °を測る。

Ｈ － ３ 号 住 居 址

調査区北側中央部Ｃ・Ｄ－3･4･5 グリッドに位置する。地表面から70cm程排土した確認面にある。覆土は焼土を含む黒褐色土とロームを含む黄褐色土が堆積している。南西部コーナに新しい芋穴が確認された。住居址の形状は長軸南北方向4.30m 、短軸東西4.20m を測り、ほぼ隅丸方形を呈す。主軸方向はＮ－76 °－Ｅを測る。壁は75 °～88 °で立ち上がる。

ピット等の名称	形状　寸法			所在・その他
	形　状	径	深	
Ｐ－１	円	30×27	6.5	北西コーナー外側
Ｐ－２	円	33×32	10.5	北西コーナー内側
Ｐ－３	楕円	46×37	11.0	南西コーナー外側
Ｐ－４	円	29×28	7.0	南西コーナー内側
Ｐ－５	楕円	44×37	9.0	東壁ほぼ中央

カマドは東壁南寄りに位置し壁外に構築されている。主軸方向は（θ）＝N－84 °－Eを測る。左袖石が１石確認された。カマドの寸法は最大径（a）＝88cm、全長（b）＝ 180cm、煙道部幅（f）＝21cm、燃焼部幅（g）＝55cm、煙道立ち上がり角度（σ）＝25 °を測る。

カマド燃焼部で台付甕の台部が胴部との接合部で剥れたものを検出した。

Ｈ － ４ 号 住 居 址

調査区北側中央部Ｄ・Ｅ－3･4･5 グリッドに位置する。地表面から70cm程排土した確認面にある。覆土は Hr-FP及びＣ軽石を含む黒褐色土とロームブロック及び焼土粒を含む黄褐色土が堆積している。住居址の形状は長軸方向 4.20m、短軸方向 2.88mを測り、歪んだ隅丸長方形を呈す。主軸方向は（θ）＝N－91 °－Eを測る。壁は58 °～88 °で立ち上がる。

ピット等の名称	形状　寸法			所在・その他
	形　状	径	深	
Ｐ－１	円	25×25	13.5	北西コーナー寄り
Ｐ－２	円	22×24	38.0	南 壁 中 央 部
Ｐ－３	円	18×15	19.5	北 壁 中 央 部

カマドは東壁中央やや南寄りに位置し、壁外に構築されている。主軸方向は（θ）＝N－97 °－Eを測る。両袖と燃焼部中央に支脚の石が確認された。カマドの寸法は最大径（a）＝92cm、全長（b）＝ 140cm、煙道長（c）＝60cm、燃焼部長（d）＝42cm、焚き口部長（e）＝38cm、煙道立ち上がり角度（σ）＝40 °を測る。

Ｈ － ５ 号 住 居 址

調査区東壁北寄りＣ－６グリッドに位置する。地表面から50cm程排土した確認面にある。ＪＲとの境界に近く、住居址の西壁の一部を確認する事ができた。覆土は Hr-FP軽石と炭化物を含む黒褐色土が堆積している。住居址の形状はＪＲとの境界に近く住居址の一部しか調査できなかった。南北4.50m 隅丸方形を呈するものと思われる。カマドは調査区外ですでに鉄道建設に伴って破壊されているものと思われる。覆土中より完形の椀が一点検出された。

（ ２ ） 土 坑

Ｄ － ２ 号 土 坑

調査区北東部Ｄ・Ｅ－６グリッドに位置する。地表面から70cm程排土した確認面にある。覆土は礫と焼土粒を含む黒褐色土が堆積している。形状は南北方向 128cm東西方向 102cmを測り、楕円形を呈する。遺物は検出されなかった。時期不明。

Ｄ － ３ 号 土 坑

調査区東側Ｅ－5･6 グリッドに位置する。地表面から約70cm程排土した確認面にある。覆土は礫と焼土粒を含む黒褐色土と礫とロームを含む黄褐色土が堆積している。形状は南北方向 157cm東西方向 129cmを測り楕円形を呈する。遺物は検出されなかった。時期不明。

Ｄ － ７ 号 土 坑

調査区中央部東側Ｆ－5･6 グリッドに位置する。地表面から約70cm程排土した確認面にある。覆土はロームを含む黄褐色土が堆積している。形状は南北方向 183cm、東西方向 1.15mを測り、楕円形である。遺物は検出されなかった。

Ｄ － １ ３ 号 土 坑

調査区南側Ｉ－６グリッドに位置する。地表面から65cm程排土した確認面にある。覆土は軽石を含む黒褐色土と焼土と小礫を含む黄褐色土が堆積している。形状は長辺 113cm、短辺 102cmの隅丸方形を呈する。遺物は縄文土器片が１点と自然石１点が検出された。

Ｄ － １ ４ 号 土 坑

調査区南側中央Ｉ・Ｊ－６グリッドに位置する。地表面から約80cm排土した確認面にある。覆土は焼土を含む黒褐色土と礫と焼土を含む黄褐色土が堆積している。形状は長辺 150cm、短辺 107cmの楕円形を呈する。遺物は縄文土器片11点が検出された。

Ｄ － １ ５ 号 土 坑

調査区南側中央部Ｉ・Ｊ－6 グリッドに位置する。地表面から約75cm排土した確認面にある。覆土は軽石を含む黒褐色土と焼土粒を含む黄褐色土が堆積している。形状は長辺 210cm、短辺 158cmの楕円形を呈する。遺物は縄文土器片９点が検出された。

３　そ の 他

- Ａ－3･4･5 、Ｂ－3･4･5･6 、Ｃ－4･5･6 グリッド内、現代の畝状遺構が確認されたＨ－１号住居の床面より深く掘られている所もありＨ－1･2 号住居のカマドは部分的に破壊されている。
- Ｊ－4、Ｋ－5･6 グリッドにかけてHr-FA が堆積する水路状の遺構が確認された。
- Ｋ－5･6 グリッド内で河原石を敷きつめたものと思われる状態の石が確認されたがこれがどのような遺構か確認するに至っていない。

Ⅵ　ま　　と　　め

西久保遺跡は、西に榛名山、東に利根川、北東には赤城山を望む地にある。榛名山の東南斜面を流下する多くの中小河川（染谷川・八幡川・午王頭川等）により火山灰堆積物を裾野に拡げ、相馬ケ原付近を扇頂とした扇状地を形成し、山裾には前橋台地を構成する地層が露呈している。

当遺跡は標高143.30～141.45m で午王頭川左岸台地上に在る。ＪＲ上越線がこの台地の中央部を南北に走り、調査地が上越線西側に在り、進入路のない地域で調査作業には色々と困難が伴った。遺構は縄文時代後期、堀之内２様式の遺物を伴う住居址１軒が確認された。これらの遺物の中には図版№８に示したように口縁部にその特色を持つ破片が数多く検出された。注口土器の破片と思われる（図版№10）や、ミニチュア土器等が検出された。13･14･15号土坑は出土した土器片の形態から縄文時代後期（堀之内式土器）のものと思われる。

平安時代の住居址が５軒確認された。確認面までの掘削中に26～31までの出土遺物があることから、多くの住居址の存在した可能性が考えられるが耕作などで撹乱され、遺構プランの確認が不可能であった。

住居址について

出土遺物から９世紀前半から10世紀前半までの土器が検出された。各住居址の特徴をまとめると平面形が横長と縦長のプランの形態に分けられる。

またカマドの袖部が住居内に構築されているものが横長であり、袖の端が壁に並行するものが縦長の形態になっている。

検出された遺物について

観察表から検討してみると甕は実測図№４･14･17･18･24を検出している。これらの内№14を除いて頸部が「コ」字状屈曲し、胴部にその最大径をもつものと思われる。

土師器坏（№10）の１点であるが、底部に丸みを帯び体部は緩やかに屈曲して開き口縁端部で緩やかに内傾している。

須恵器坏は№２･7･12･13･16･21･22･27の８点を検出した。底部は上底で回転糸切りを施し、体部は下半部で丸味を有している。底径が口径の50％前後から50％以下、口縁端部の外反・肥厚する傾向が見られる。

高台付椀は№23･25･28・30の４点を検出した。№23は底部回転糸切り、口縁部は外反しロクロ整形をしている。№25・28、底部回転糸切り、体部はやや丸味を持ち口縁部で外反し、ロクロ整形ている。

これらの遺物はロクロ整形等の土器成整形の特徴から９世紀中頃から９世紀後半のものと思われるが、検出した土器に完形品が少なく、住居址の詳細な時期を決め切らないものがある。

西久保遺跡　出土遺物観察表

法量：①口径②底径③胴部最大径④頸部・接合部径⑤裾径⑥器高⑦長さ⑧幅⑨厚み⑩穿孔径⑪重さ《①～⑩はcm、⑪はg、( )は推定値を表す》

No.	位置	器種	法量	胎土	焼成	色調	特徴	遺存
1	H-1	須恵器 蓋	①(16.2) ⑥(1.9)	普通	還元	青灰	体部で緩やかに外傾。口縁部は短かく内傾し、ロクロ整形。	¼弱残
2	H-1	須恵器 坏	①(11.8) ②(7.0) ⑥3.2	普通	還元	青灰	底部は僅かに上底。体部は緩やかに内彎して立ち上がる。内外面ロクロ整形。底部回転糸切未調整。	¼残
3	H-1	鉄製品	⑦現存5.7 ⑧1.9 ⑨0.2 ⑪11.26				刃部のみ残存。	
4	H-1	土師器 甕	①(17.8) ⑥(6.0)	普通	酸化	橙	口縁部は「コ」の字状を呈し、胴部は緩やかに内彎する。外面口縁部指押さえ横位のナデ。胴部横位のヘラ削り、内面横位のナデ。	⅙弱残
5	H-2	鉄製品 鎌	⑦現存長9.4 ⑧1.9～2.5 ⑨0.2 ⑪24.67				身部緩やかに彎曲し、身部先端欠損。	身部一部残
6	H-2	鉄製品 刀子	⑦現存12.7 ⑧1.2 ⑨0.3 ⑪12.70				刃部先端を欠損する。関部は棟・刃共に段をなす。茎部は端部に向かって先細り。	－
7	H-2	須恵器 坏	②(6.0) ⑥(1.7)	普通	還元	明緑灰	平底。体部は直線的に外傾。ロクロ整形。底部回転糸切未調整。顕著なロクロ整形。	底部⅔残
8	H-3	石製品 紡錘車	①上径3.5 ②下径4.4 ⑨1.9 ⑩0.9 ⑪51.43			灰白	断面台形状。下径面、平坦面。上径部はやや凸状。側面と下面研磨。安山岩。	－
9	H-3	鉄製品	⑦現存10.2 ⑧4.8 ⑨0.3 ⑪59.87				身部先端欠損する。一端折れ曲がる。背側平らである。	－
10	H-3	土師器 坏	①(12.2) ⑥3.5	普通	酸化	明褐	体部は緩やかに内彎する。口縁部は端部で僅か内傾し、丸底気味の底部。内外面口縁部横位のナデ、体部指押えナデ。底部ヘラナデ。	口縁部½欠損
11	H-3	鉄製品 刀子	⑦現存12.9 ⑧1.4 ⑨0.3 ⑪15.75g				刀部先端及び茎端部を欠損する。棟関部は茎よりわずかの段差を認む。刃部は、茎部より緩い角度で段を有す。茎部は端部に向かって先細りし、一部木質痕あり。	－
12	H-3	須恵器 坏	①(11.8) ②6.7 ⑥3.2	粗	還元	暗青灰	若干上げ底。体部は下半部で丸みを有し、上半部～口縁部にかけて外反する。ロクロ整形。底部右回転糸切。	口縁一部欠損
13	H-3	須恵器 坏	①(13.2) ⑥3.3	粗	還元	暗青灰	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁付近で外反する。体部外面ロクロ整形。底部回転糸切り。	体部¼残
14	H-3	土師器 甕	①(19.8) ⑥(6.4)	良	酸化	赤褐	胴部は緩やかに立ち上がり口縁部で外反する。口縁部上位に接合面が残る。口縁部内外面横位のナデ、外面指押え。胴部ヘラ圧痕。内面ヘラナデ痕有り。	¼残
15	H-3	脚付甕	②10.4 ⑥(2.8)	良	酸化	赤褐	脚部は中位で屈曲し、裾端部で緩やかにひろがる。脚部内外面横ナデ。	接合部のみ
16	H-3	須恵器 坏	①(12.8) ⑥3.5	粗	還元	青灰	底部は上底気味。体部は緩やかに丸みをもち口縁部で外反する。ロクロ整形。底部糸切り。	½残
17	H-3	土師器 甕	①(19.4)	良	酸化	明黄褐	口縁部は「コ」の字状を呈し、端部で外反する。口縁部横ナデ。胴部外面は右横位のヘラ削り。	口縁部¼残
18	H-3	土師質 甕	①(18.8) ⑥(7.6)	良	酸化	明赤褐	口縁部は「コ」の字状を呈し、口唇部に沈線を有す。口縁部内外面横位のナデ。頸部外面に指押え痕あり。口縁部中位に接合面が残る。	⅙残
19	H-3	鉄製品	⑦現存14.6 ⑧4.5 ⑨0.3 ⑪66.70				身部全体が大きく彎曲する。一端折れ曲がる。背側平ら。刃部先端を大きく欠損する。	－
20	H-4	鉄製品	⑦現存12.9 ⑧4.2 ⑨0.3 ⑪78.09				身部全体が大きく彎曲する。一端折れ曲がる。背丸。刃部先端を大きく欠損する。木質部付着。	－
21	H-4	須恵器 坏	①(13.0) ⑥3.2	良	還元	暗青灰	上げ底。体部は僅か丸味をもち立ち上がり、口縁部で外反する。ロクロ整形。底部回転糸切り。	⅓残
22	H-4	須恵器 坏	①(12.8) ②(7.0) ⑥2.9	－	還元	灰白	平底。体部緩やかに彎曲し口縁部僅かに外反する。ロクロ整形。底部回転糸切り。底部の器肉は薄い。	¼残
23	H-4	高台付 椀	①(16.4) ②9.0 ⑥6.6	普通	還元	青黒	大型の椀。体部は緩やかに内彎して立ち上がり、口縁部で僅か外反する。ロクロ整形。底部回転糸切り。「ハ」の字状付高台、ナデ。	⅔残
24	H-5	土師器 甕	①(19.4) ⑥(10.5)	良	酸化	明褐	口縁部は「コ」の字状を呈し、胴部上半で丸みを持つ。内外面口縁部横ナデ。胴部横、斜位のヘラ削り。	口～胴
25	H-5	高台付 椀	①14.4 ②高台径7.4 ⑥5.3	粗	酸化	明黄褐	高台は「ハ」の字に外傾して開く。体部はやや丸みをもって立ち上がり口縁部で外反する。体部はロクロ整形。底部回転糸切後付高台。内外面共に細砂を含む。	完形
26	4A-63	須恵器 皿	①(13.2) ②(7.0) ⑥2.1	良	還元	青灰	雑な高付を付した底部から直線的に外反する体部。器面に歪み有り。内外面ロクロ整形。底部回転糸切り後ヘラナデ調整。	¾残
27	4A-63	須恵器 坏	①(13.0) ②5.4 ⑥3.6	普通	還元	暗青灰	底部は上げ底気味で体部下半で稜をなし、緩やかに内彎しながら口縁部で外反する。外面ロクロ整形。底部回転糸切り。	¼残
28	4A-63	土師質 椀	①(14.4) ⑥(4.5)	良	還元	青黒	体部丸みを持ち、口縁部で外反する。外面ロクロ整形、内面ナデ調整。	口縁部¼残
29	4A-63	土師質 皿	①14.2 ②7.2 ⑥3.1	良	酸化	浅黄	「ハ」の字状に外傾する高台。体部大きく外傾して開き、口縁部外反し、口唇部で水平をなす。口唇部内外面に油煙付着。内外面横ナデ。底部回転糸切り。付高台ナデ。灯明皿。	完形
30	4A-63	須恵器 椀	②(7.0) ⑥(2.0)	良	還元	青灰	直立気味に立つ高台。体部はやや内彎する。ロクロ整形。付高台ナデ。底部回転糸切り。内面墨書。高台部、部分的にいびつ。	底部のみ
31	4A-63	須恵器 皿	①(13.2) ②(8.7) ⑥2.5	良	還元	灰白	「ハ」の字状に外傾する高台。体部は直線的に外傾して開く。ロクロ整形。底部回転糸切り。付高台、ナデ。内面赤色を呈する部分有り。	½残

法量：①口径②底径③胴部最大径④頸部・接合部径⑤裾径⑥器高⑦長さ⑧幅⑨厚み⑩穿孔径⑪重さ《①～⑩はcm、⑪はg、( )は推定値を表す》

No.	位置	器　種	法　　量	石材	特　　徴
32	J-1	打制石斧	⑦8.8 ⑧7.2 ⑨2.7 ⑪200	黒色頁岩	分銅形石斧の½。
33	J-1	石斧	⑦7.3 ⑧7.7 ⑨1.3 ⑪83.55	安山岩	分銅形石斧。
34	4A-63	多孔石	⑦21.6 ⑧17.2 ⑨13.6 ⑪51.00	安山岩	両面使用痕あり。
35	J-1	石錐	⑦7.9 ⑧1.2 ⑨0.7 ⑪5.39	黒色頁岩	錐部が非常に細長く精巧である。後期
36	J-1	石器	⑦6.0 ⑧5.3 ⑨1.5 ⑪47.46	黒色頁岩	掻器。
37	J-1	凹石	⑦10.3 ⑧7.8 ⑨6.0 ⑪460	安山岩	片面使用痕あり。
38	D-13-1	凹石	⑦13.2 ⑧12.9 ⑨6.3 ⑪1100	安山岩	両面使用痕あり。

参 考 文 献

清里・陣馬　1981　（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

芳賀東部団地　1988　前橋市教育委員会

下東西　1987　（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

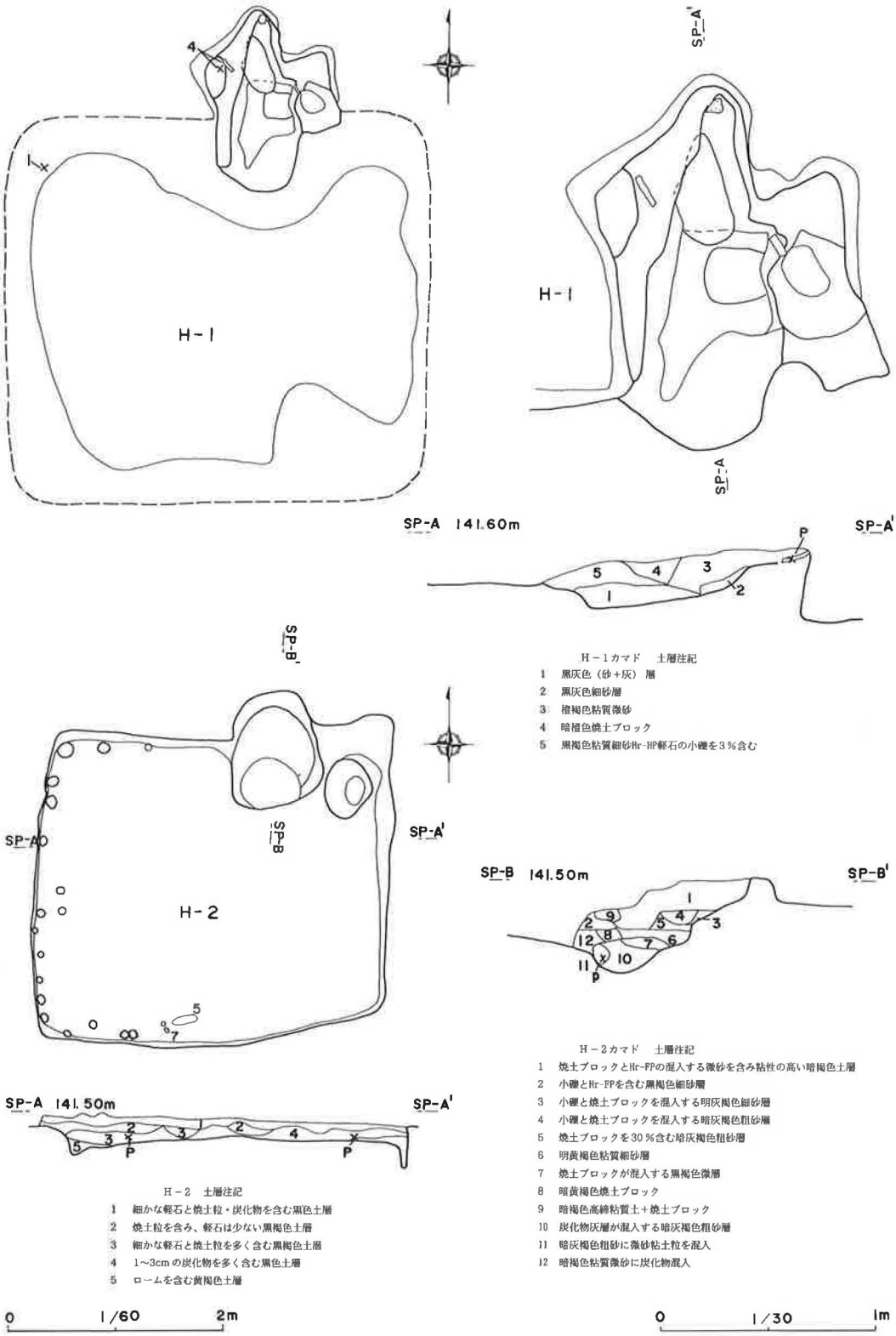
柿木　1984　前橋市教育委員会

鳥羽　1986　報告書第11集　（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

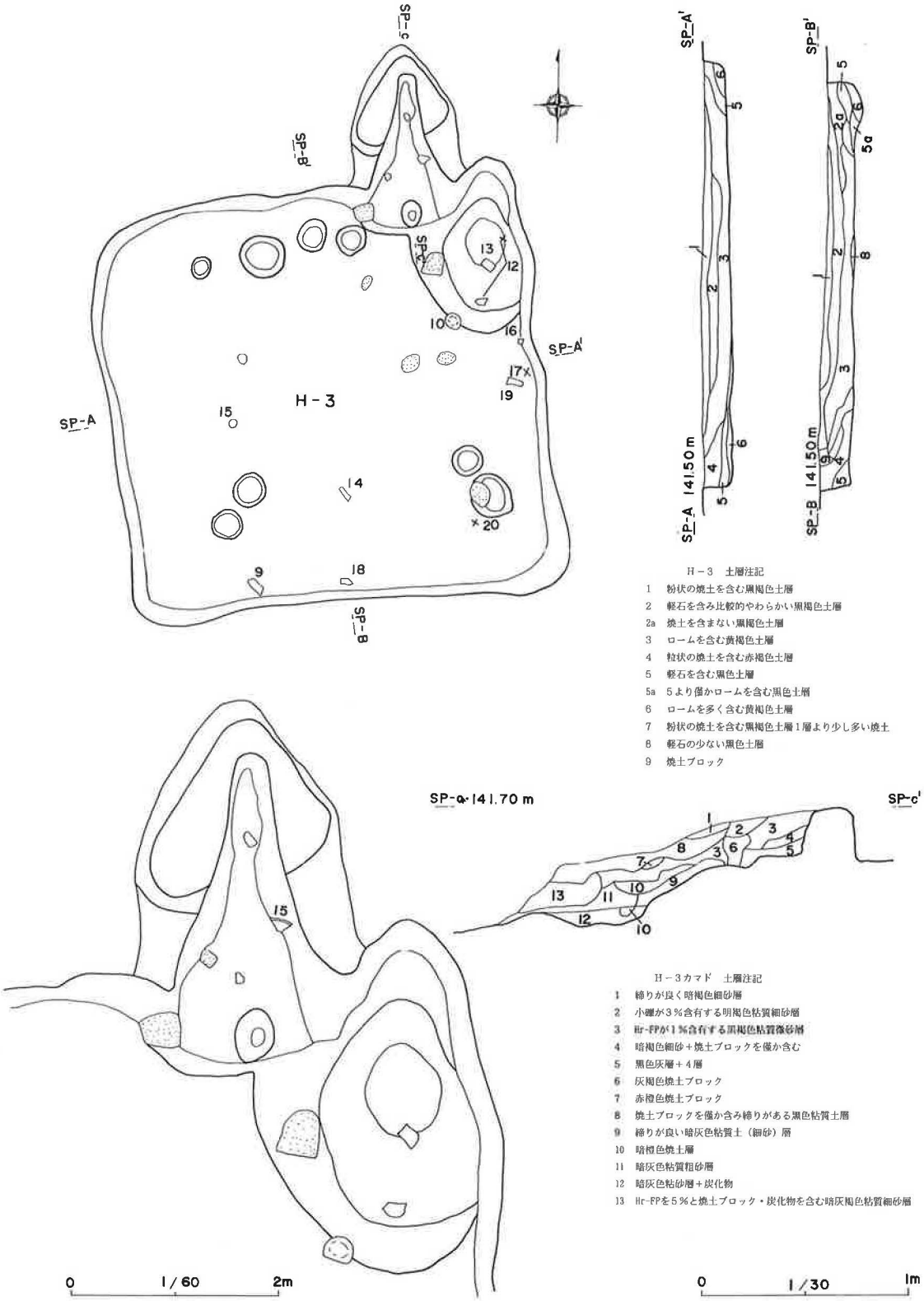
村東　1988　前橋市埋蔵文化財発掘調査団

柿木Ⅱ　1988　前橋市教育委員会

若宮　1989　前橋市埋蔵文化財発掘調査団



第 4 図　H－1号住居跡・カマド,H－2号住居跡・カマド実測図



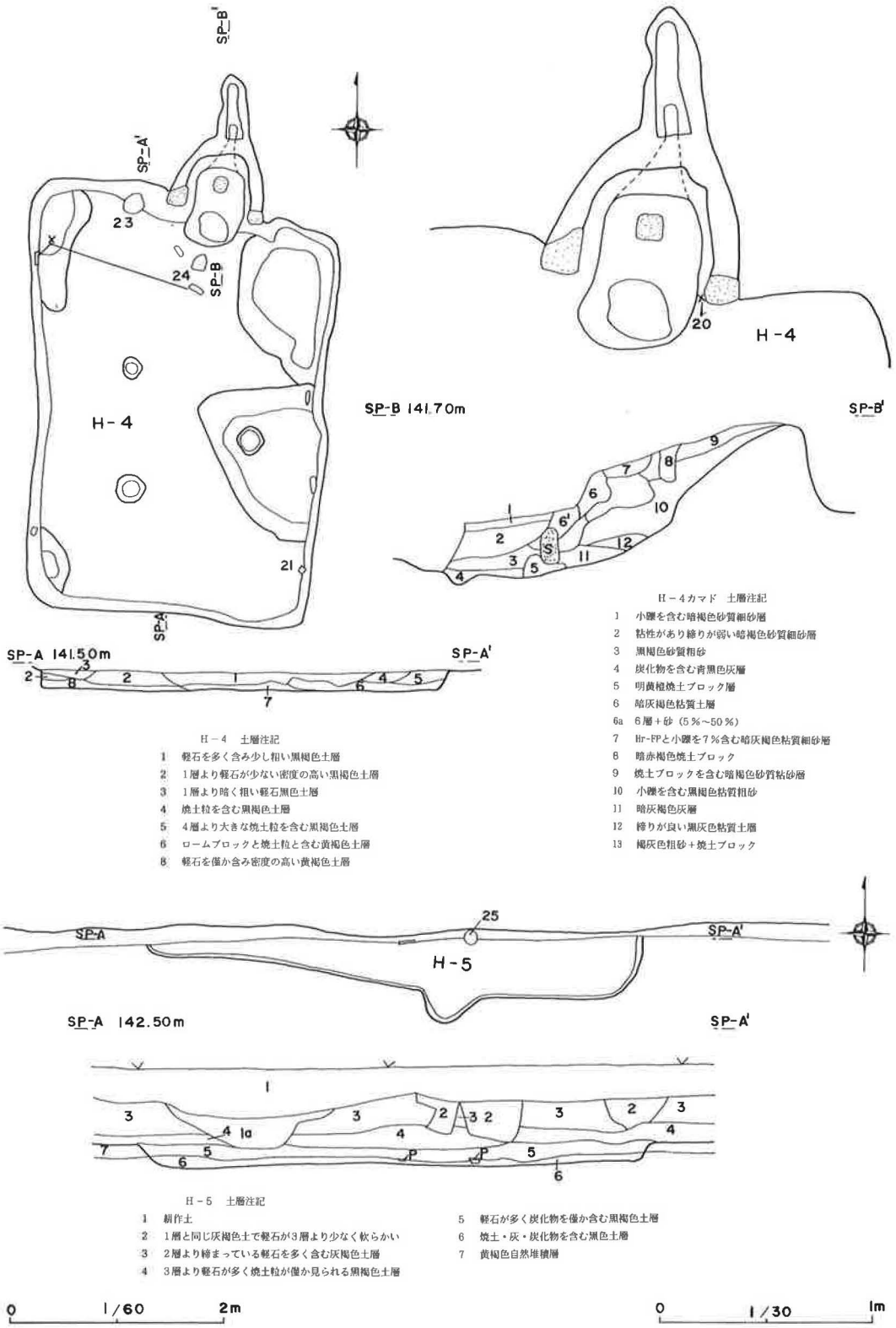
H－3　土層注記

1　粉状の焼土を含む黒褐色土層
2　軽石を含み比較的やわらかい黒褐色土層
2a　焼土を含まない黒褐色土層
3　ロームを含む黄褐色土層
4　粒状の焼土を含む赤褐色土層
5　軽石を含む黒色土層
5a　5より僅かロームを含む黒色土層
6　ロームを多く含む黄褐色土層
7　粉状の焼土を含む黒褐色土層1層より少し多い焼土
8　軽石の少ない黒色土層
9　焼土ブロック

H－3カマド　土層注記

1　締りが良く暗褐色細砂層
2　小礫が3％含有する明褐色粘質細砂層
3　Hr-FPが1％含有する黒褐色粘質微砂層
4　暗褐色細砂＋焼土ブロックを僅か含む
5　黒色灰層＋4層
6　灰褐色焼土ブロック
7　赤橙色焼土ブロック
8　焼土ブロックを僅か含み締りがある黒色粘質土層
9　締りが良い暗灰色粘質土（細砂）層
10　暗橙色焼土層
11　暗灰色粘質粗砂層
12　暗灰色粘砂層＋炭化物
13　Hr-FPを5％と焼土ブロック・炭化物を含む暗灰褐色粘質細砂層

第 5 図　H－3号住居跡・カマド実測図



H－4カマド　土層注記

1　小礫を含む暗褐色砂質細砂層
2　粘性があり締りが弱い暗褐色砂質細砂層
3　黒褐色砂質粗砂
4　炭化物を含む青黒色灰層
5　明黄橙焼土ブロック層
6　暗灰褐色粘質土層
6a　6層＋砂（5％～50％）
7　Hr-FPと小礫を7％含む暗灰褐色粘質細砂層
8　暗赤褐色焼土ブロック
9　焼土ブロックを含む暗褐色砂質粘砂層
10　小礫を含む黒褐色粘質粗砂
11　暗灰褐色灰層
12　締りが良い黒灰色粘質土層
13　褐灰色粗砂＋焼土ブロック

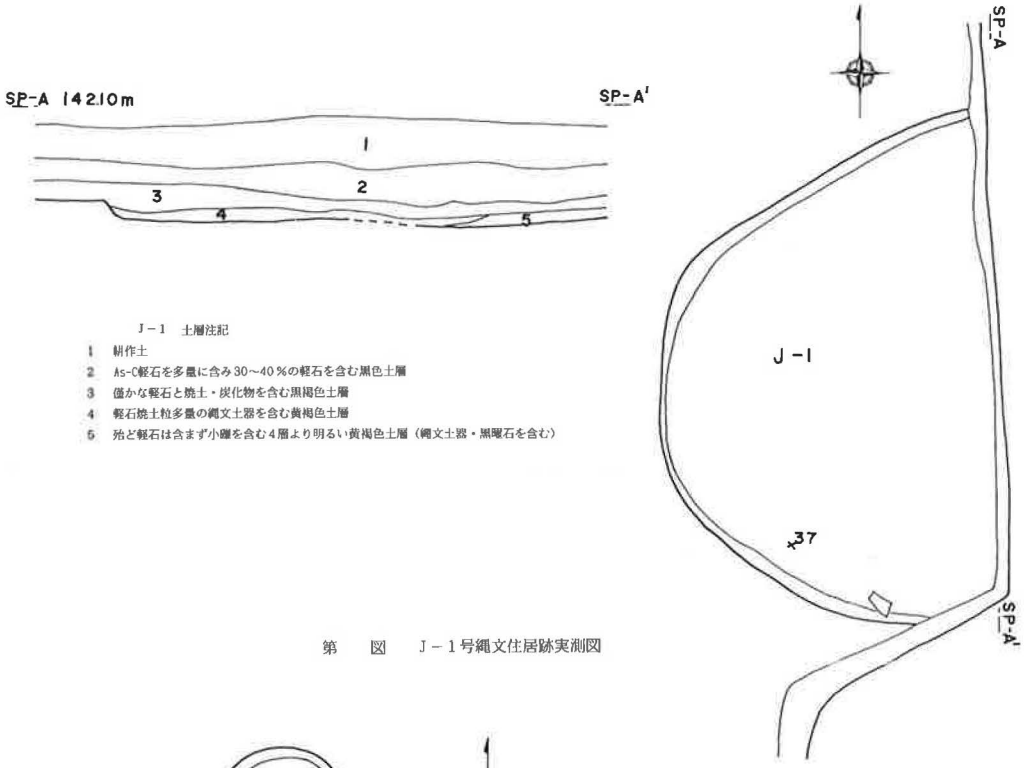
H－4　土層注記

1　軽石を多く含み少し粗い黒褐色土層
2　1層より軽石が少ない密度の高い黒褐色土層
3　1層より暗く粗い軽石黒色土層
4　焼土粒を含む黒褐色土層
5　4層より大きな焼土粒を含む黒褐色土層
6　ロームブロックと焼土粒と含む黄褐色土層
8　軽石を僅か含み密度の高い黄褐色土層

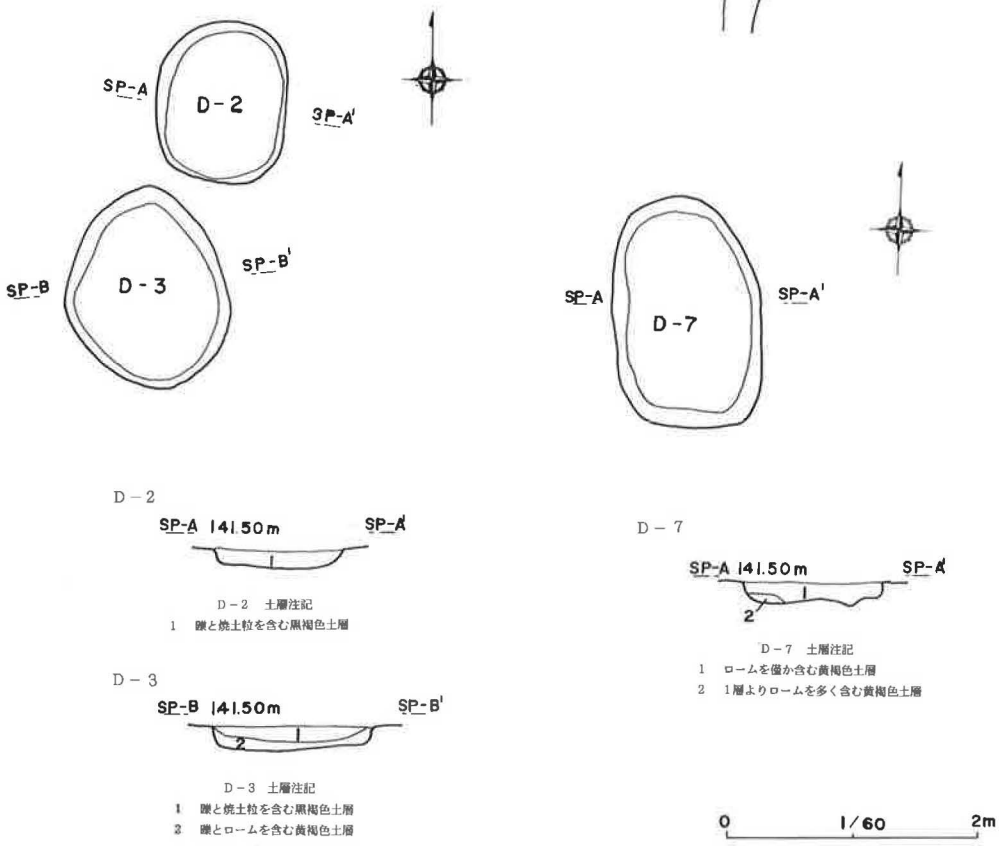
H－5　土層注記

1　耕作土
2　1層と同じ灰褐色土で軽石が3層より少なく軟らかい
3　2層より締まっている軽石を多く含む灰褐色土層
4　3層より軽石が多く焼土粒が僅か見られる黒褐色土層
5　軽石が多く炭化物を僅か含む黒褐色土層
6　焼土・灰・炭化物を含む黒色土層
7　黄褐色自然堆積層

第 6 図　H－4号住居跡・カマド,H－5号住居跡実測図

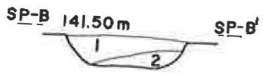


第　図　J－1号縄文住居跡実測図



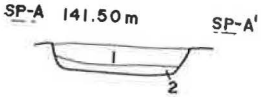
第 7 図　D－2・3・7号土坑跡実測図

D－13

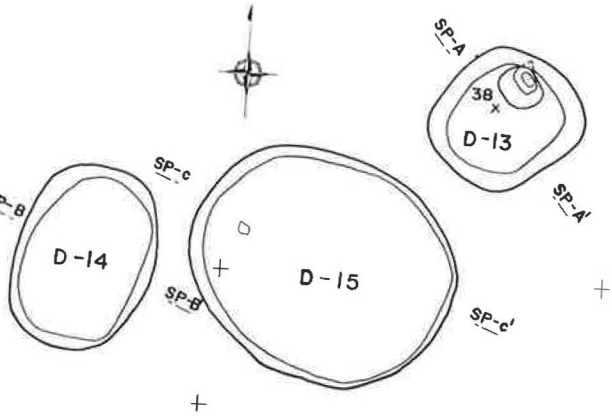


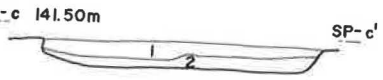
D－13 土層注記
1 軽石を含む黒褐色土層
2 焼土と小礫を含む黄褐色土層

D－14



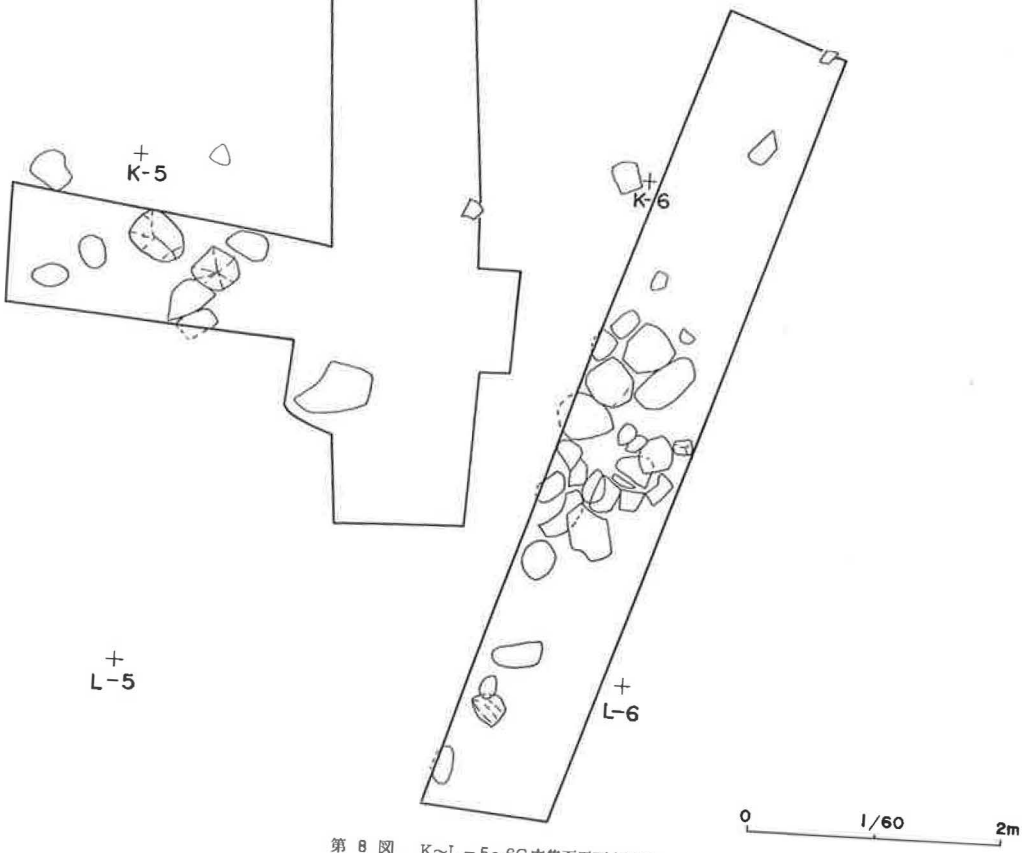
D－14 土層注記
1 焼土粒を含む黒褐色土層
2 礫と焼土を含む黄褐色土層



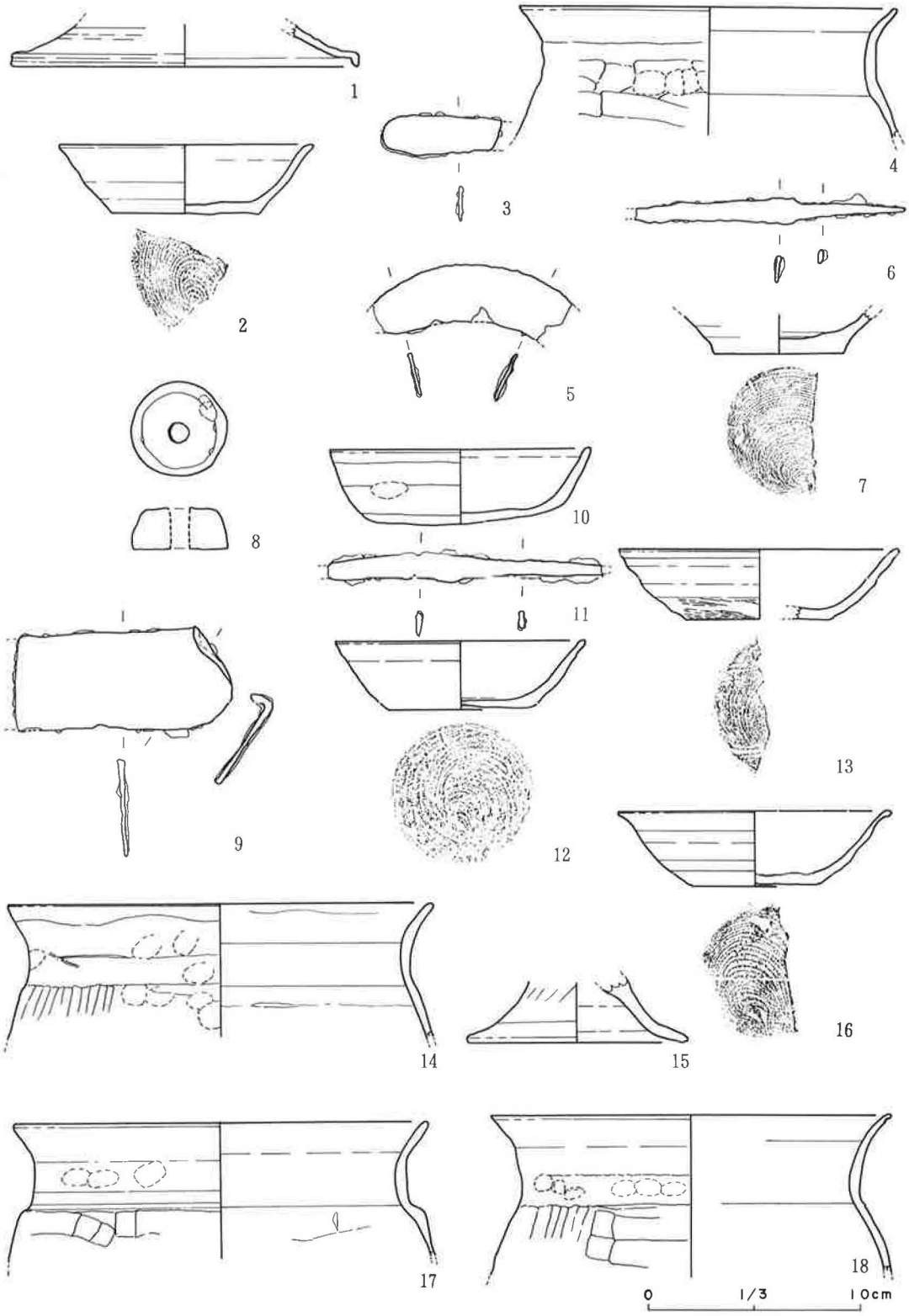


D－15 土層注記
1 軽石を僅か含む黒褐色土層
2 焼土粒を僅か含む黄褐色土層

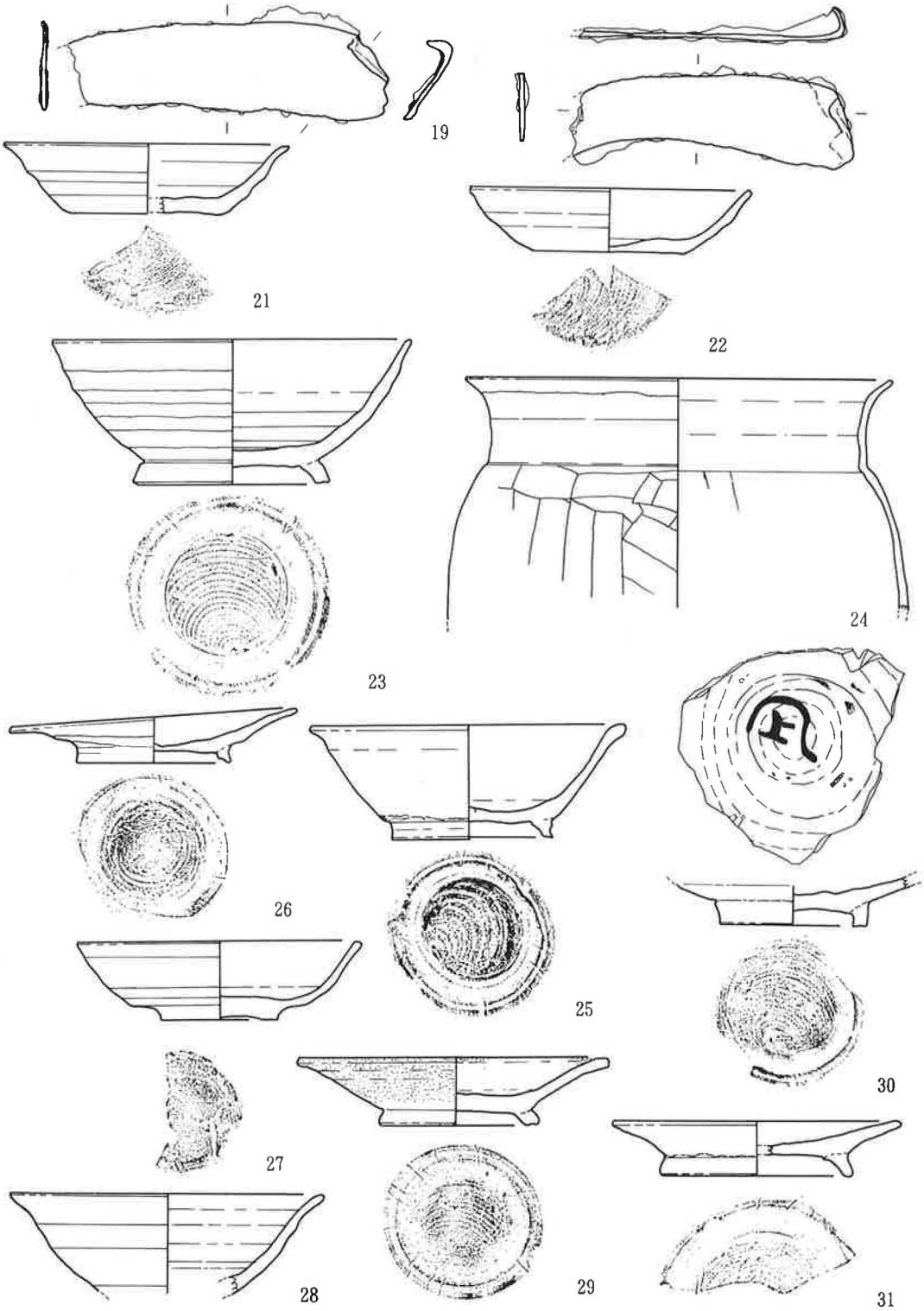
第 図 D－13～15号土坑跡実測図



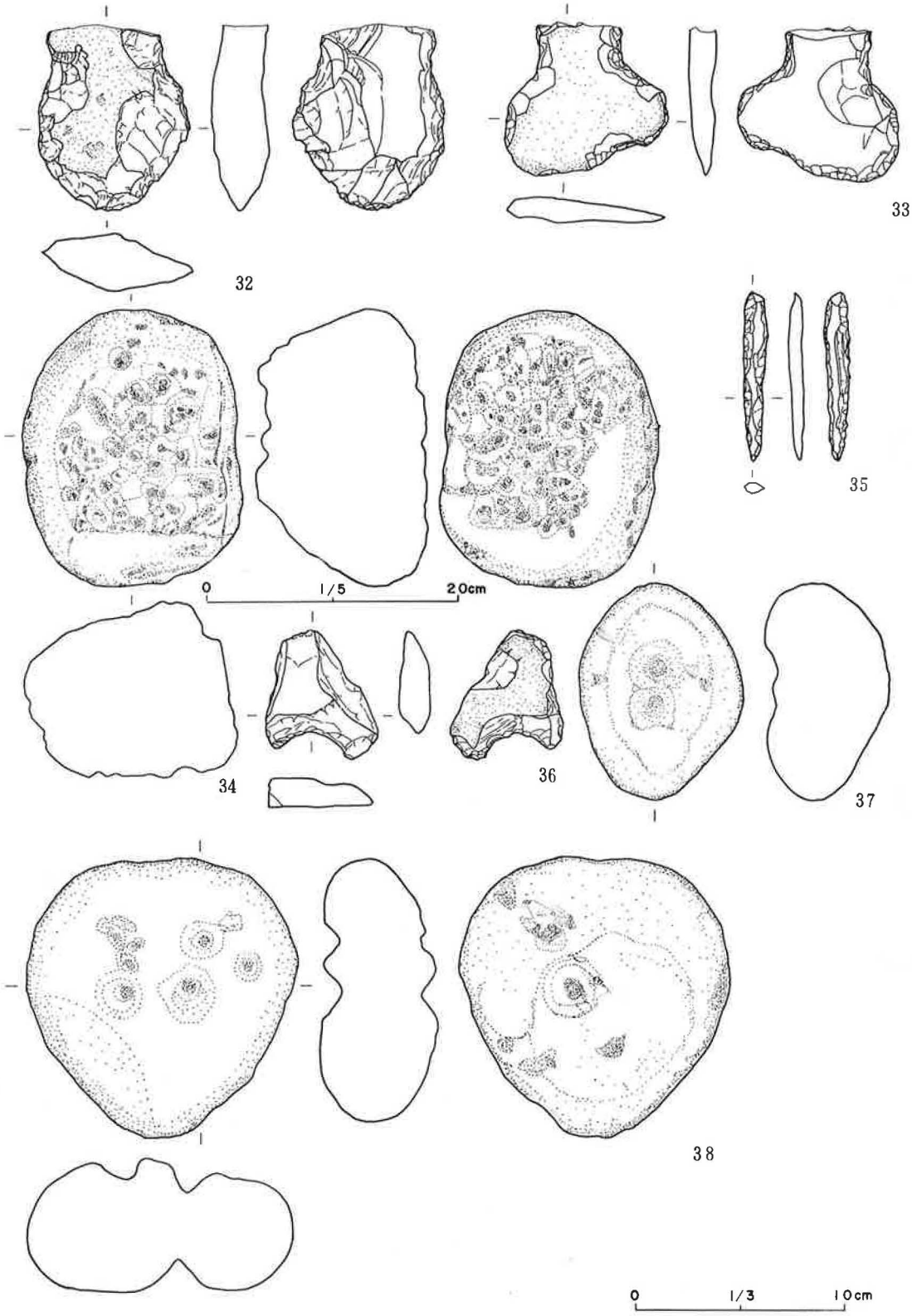
第 8 図 K～L－5～6G内集石平面実測図



遺物実測図1（No.1～18）

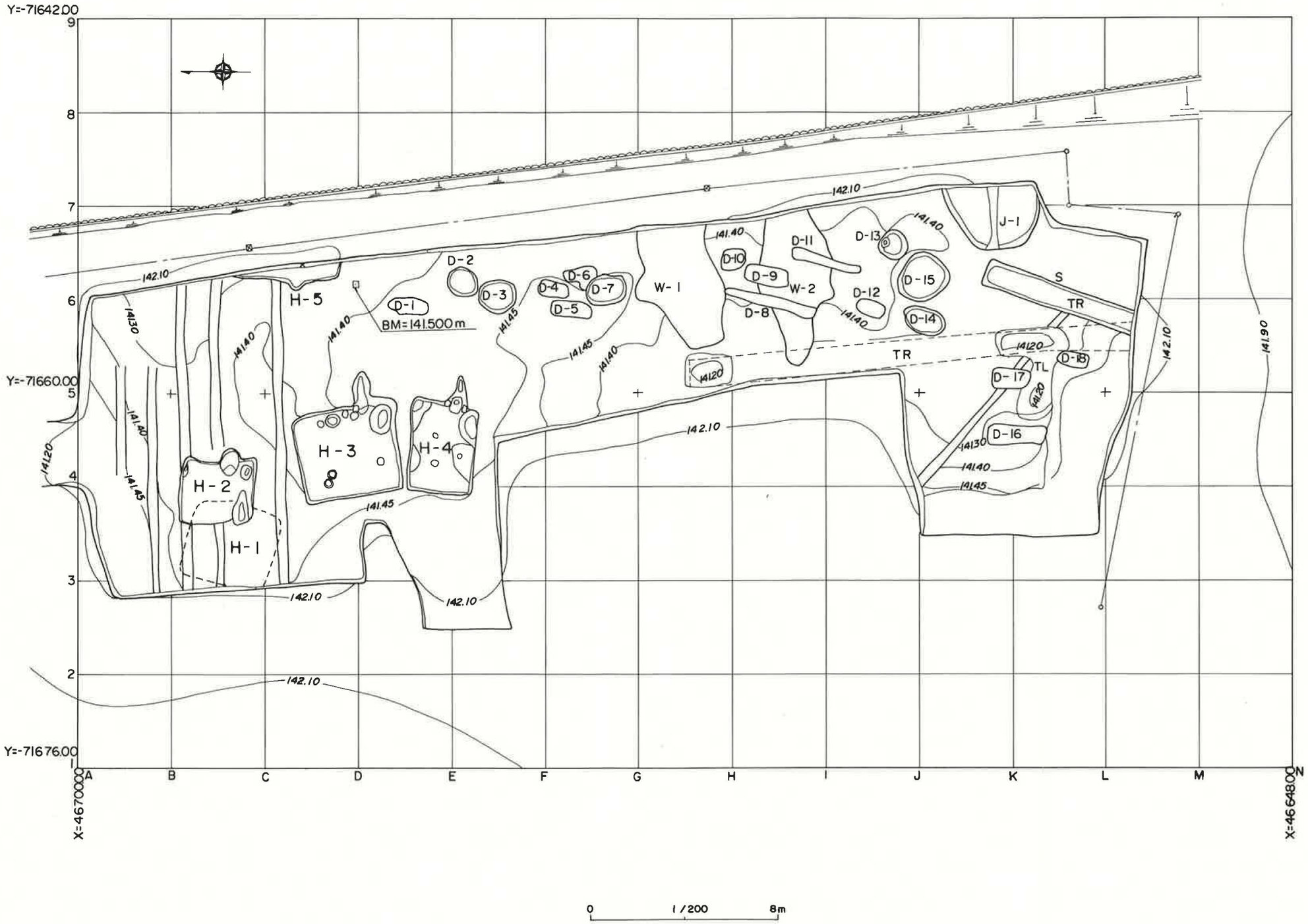


遺物実測図2（No.19～31）



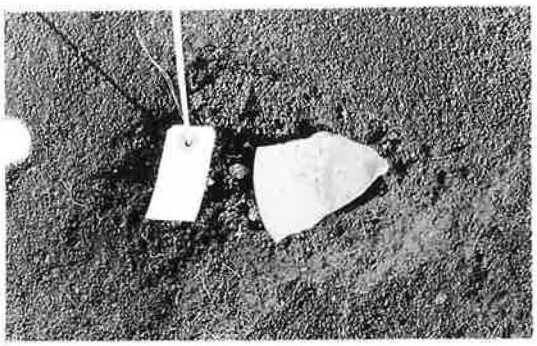
遺物実測図3（No.32～38）

西久保遺跡全体平面図


Y=-71642.00
Y=-71660.00
Y=-71676.00
X=46700.00
X=46648.00
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
N
1
2
3
4
5
6
7
8
9
H-1
H-2
H-3
H-4
H-5
D-1
D-2
D-3
D-4
D-5
D-6
D-7
D-8
D-9
D-10
D-11
D-12
D-13
D-14
D-15
D-16
D-17
D-18
W-1
W-2
J-1
S
TR
TL
BM=141.500m
142.10
141.40
141.45
141.30
141.20
141.90
0
1/200
8m

西久保遺跡調査区全景

Ｈ－１カマド完掘

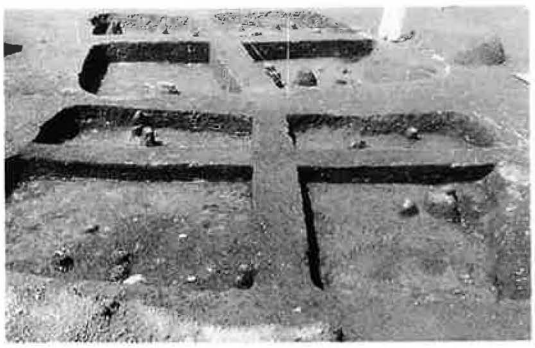


Ｈ－１出土遺物

Ｈ－２全景（完掘）

Ｈ－２カマド完掘

Ｈ－２カマド土層断面



Ｈ－３・４土層断面

Ｈ－３全景（完掘）

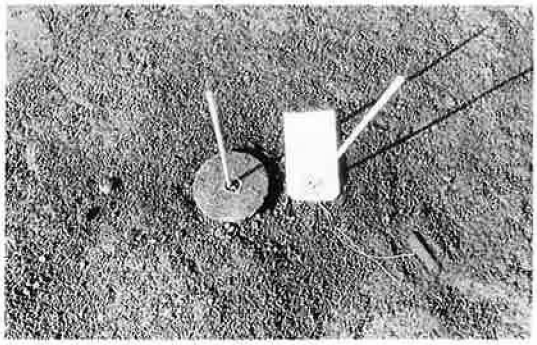
図版　2

H－3遺物出土状況

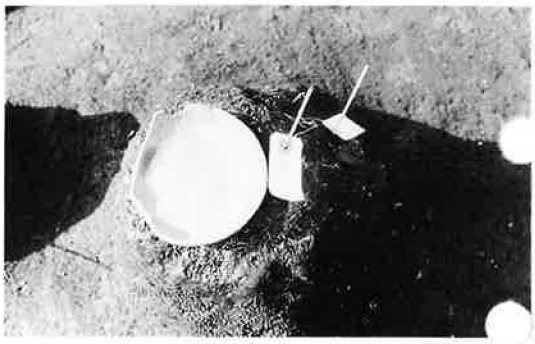
H－3遺物出土状況

H－3遺物出土状況

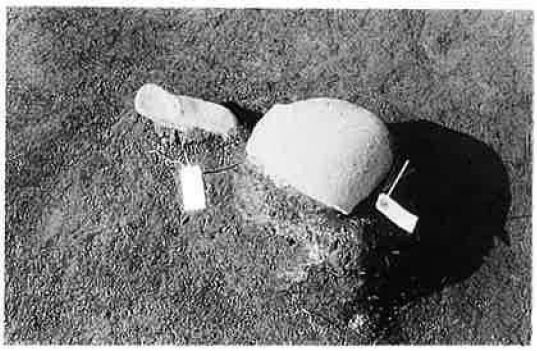
H－3カマド土層断面



H－3遺物出土状況



H－3遺物出土状況



H－3遺物出土状況

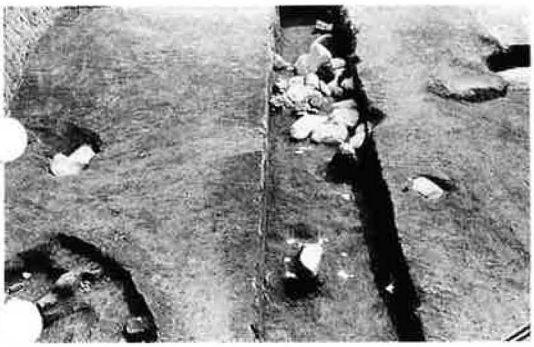
H－3遺物出土状況

Ｈ－４全景

Ｈ－４カマド完掘・遺物出土状況

Ｈ－３・４ 全景

Ｊ－１遺物出土状況



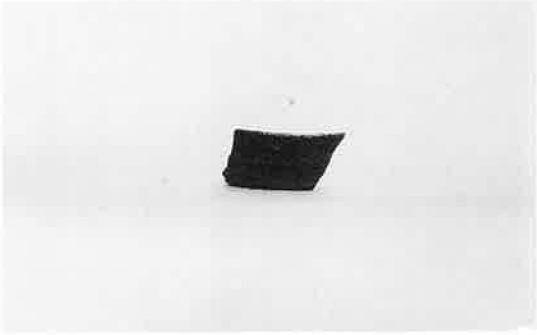
集石トレンチ状況（K～L－5～6G内）

Ｄ－13　全景

Ｄ－14遺物出土状況

Ｄ－15土層断面

NO. 1



NO. 2

NO. 4

NO. 7

NO. 8

NO. 10

NO. 12

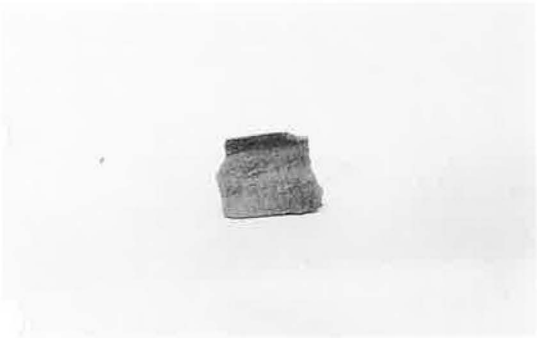
NO. 13

NO. 14

NO. 15

NO. 16

NO. 17



NO. 18

NO. 21

NO. 22

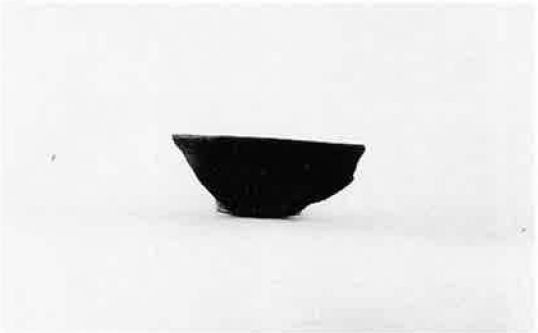
NO. 23

NO. 24

NO. 25

NO. 26

NO. 27



NO. 28

NO. 29

NO. 30表面

NO. 30内面

NO. 31

NO. 3・5・6・11

NO. 9・19・20

NO. 35・36

NO. 32・33

NO. 34

NO. 37・38

加曽利E2

堀之内Ⅱ口縁部表面

堀之内Ⅱ口縁部裏面

縄文後期　表面

縄文後期　裏面

縄文後期

縄文後期　胴部

縄文後期　胴部

縄文後期　底部

縄文後期　底部

縄文後期　注口土器

縄文中期～後期

縄文後期　ミニチュア土器

宅地造成事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

西　久　保　遺　跡

平　成５年　3月20日　印刷
平　成５年　3月25日　発行

発行者　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
前橋市上泉町６６４番地の４

編　集　スナガ環境測設株式会社
前橋市青柳町２１１番地の１

印　刷　有限会社サクラヤ印刷所